

人を育てるピアノ学習

小 倉 郁 子

1. はじめに

ピアノの指導者になって30年余り。その間に自らの子育てに携わった。この報告書ではピアノ指導者という立場で子育てをした経験を基に子育てとピアノ学習の関わりをまとめた。

2. ピアノ学習の位置づけ

ピアノ学習の目的とはどんなことであろうか。ピアノ学習は情操教育のひとつとして位置づけられ、一般的にはピアノ演奏の技術を習得して情操豊かな人間性を身につけることと考えられている。情操とは高等な心の活動によっておこる感情、知的感情とされている。また高等な心とは道徳心を身につけた人の思考力や判断力に富んでいる精神のことである。知性と共に豊かな感情を育てることこそ情操教育の根幹であり、ピアノ教育の役割と心得る。情操は人として必要不可欠なものであり、幼い頃から教育していくべきものである。それ故子育てはピアノ学習とリンクさせることが可能であり、それによって高い成果が期待されると思われる。

3. ピアノ学習とは

作品を仕上げていく過程を考える。

① 読譜

読譜に際して音楽理論の習得は、音楽のつくりを知るための必須条件である。その上で、記号で記された楽譜を図形的に見る分析力や、作曲家の心情を理解するためにその作曲家の伝記や時代的背景・宗教的背景についての知識を得ておくこと、ピアノという楽器の歴史を把握しておくことも必要である。このように読譜とは多様な知識と想像力を駆使し、統合してその曲に対するイメージをつくることである。

② 演奏技術の習得

知的作業の読譜を入念にしても、それを演奏できなければ音楽にはならない。演奏をするためにテクニックは必要不可欠なものである。そのテクニックを使いこなし、芸術水準の高い作品に仕上げるには、相当の努力が必要である。

③ ソルフェージュの学習

詳細に楽曲分析をし、多方面からのアプローチによって曲をイメージし、それを表現するための高度なテクニックがあったとしても、音楽は完成しない。そのイメージを音で表現するためにソルフェージュが必要なのである。音楽作品は、音楽理論を土台にイメージした楽曲をソルフェージュで身につけた5つの感覚と演奏技術を駆使して表現される（図1）。

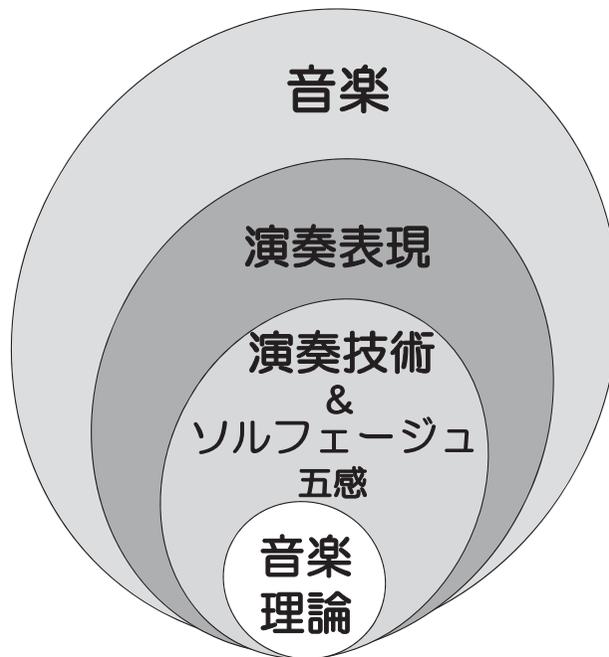


図1. ソルフェージュの役割

ソルフェージュは音楽理論と演奏技術を融合させる上で重要な役割を担っているのである。

ソルフェージュは、音楽理論・読譜・聴取能力・リズムを学習する総合的な基礎教育のことである。それは18世紀にイタリアとフランスで歌唱練習のために始まり、19世紀にフランスで現在の形になった。その後スイスのダルクローズ（1865～1950）によってリトミックという全身を使って音楽の動きを表現する教育法が創られた。現在この2種類の教育法が存在し、これらは音楽を学ぶ人が習得すべき音楽の基礎となっている。両教育法を比較すると、ソルフェージュは楽譜を中心とした音楽理論を実際の音に結びつける教育であり、リトミックは身体の動きと音を結びつけたリズム中心の教育である。リトミックは幼

児教育として浸透したのであって、ソルフェージュ教育としての浸透率はまだ低い。しかし、私のピアノ指導の経験では、両方の教育法が必要であると考えている。

リトミックを考案したダルクローズは、「歩くという自然な動きのなかに、速度や拍子の変化、そして音楽の強弱があることを認識した。音楽は動きであって常に流れている。その中に流れの強さ、速さ、重さ、拍子、方向、フレーズ、ニュアンス、色彩などの全ての要素がある。その一つ一つが音楽の表現手段である。」と述べている（石丸,1996）。リトミックは「身体の動きを通して学ぶソルフェージュ」であるともいえる。自らが身体でリズムを感じることによって瑞々しいリアルな音楽表現が導けるというメリットがある。その反面、読譜、特に音楽理論に関してはリトミックだけで全てを習得するには長期間を要するので、従来のソルフェージュも交えて学習することが習得の早道であり、理想と考える。

ソルフェージュとリトミックの学習内容の中には、ピアノ演奏で効果的な役割を果す要素として次の5感がある。

- a. 速度感 : 一定の速度を保持することで、音楽の基礎を作る。
- b. 拍子感 : 曲の骨格を作り出す。
- c. リズム感 : ある秩序によって並んだ音の長さの組み合わせをいい、音楽の生命力ともいわれている。そこから生まれるエネルギーや規則性に鋭敏に反応して表現する。
- d. 音感 : 自分の弾いた音や歌った音の正しさを確認するために必要な能力である。
- e. 和声感 : イメージを音にするために必要な全ての要素をバランスよく調和させる役割を果す。

これら5つの要素が「音楽の五感」として演奏表現の土台になっている。安定したテンポの流れに規則正しい拍子の抑揚、その上に奏でられる美しい旋律は、リアルなリズムとハーモニーによって果てしなく広がる空間の音楽を求めて演奏される。このような演奏表現をするために「音楽の五感」が大きな役割を果している。

④ソルフェージュ学習の問題点とその解決

ソルフェージュは全て経験を通して身につけるもので、その習得には長時間を要する。しかも、音感は学ぶ時期を逃すと習得が不十分になってしまうといわれている。しばしば音楽には早期教育が求められるが、それは音楽ではなくソルフェージュ教育に対して求められるのである。

しかし、一般的にはソルフェージュの重要性は理解されず、浸透していない。このことは長年指導者の間では問題視されてきた。

そこで私は生徒や保護者にソルフェージュの重要性を理解してもらうために、それを料理に例えて次のように説明している。

音楽理論はレシピに相当する。演奏技術は調理に必要な包丁さばきや火加減調整などの技である。レシピにそって調理すれば料理はできるが、必ずしも美味しくできるとは限らない。なぜなら人それぞれに好みがあるからである。食べる人の体調や健康を考えて工夫と応用で料理を仕上げていくのである。それには経験とセンスが必要になる。その時々 conditions に合わせて創意工夫する部分がソルフェージュである。そして出来上がった料理をどのような器に盛り付けるのか、テーブルクロスはどのようなものにしようか、音楽を流して花も飾ろうかなどと食卓を取り巻く環境までコーディネートをする。このことがソルフェージュを活かした演奏表現である。

ピアノ学習は自らの力で楽曲を解釈し、洗練された耳で判断し、表現力豊かな演奏へと導くために、ソルフェージュの3本柱である理論・読譜・五感のバランスの良い習得が大切である。

4. 情操教育としてのピアノ学習

生徒の学習を具体的に考えてみる。

①幼い生徒の学習形態

ピアノ学習は、非常に緻密な作業の積み重ねであり、長時間を要するため、その学習には親の支援が必要である。その期間は親子の絆を深める絶好の機会でもある。私は保護者に子供に向き合う際には本気で取り組むように勧めている。それによって親子共に達成感や成功体験だけでなく、それを通じた親子の強い絆も得ることができるからである。子供をどのようにリードして密度の高い練習をさせるかによって仕上がりが左右される。家庭での練習の仕方が完成度に大きく影響するので、指導者はそのための適切なアドバイスを担当する。そして家庭では親がリードするという形をとらざるを得ない。生徒と親と指導者とのバランスのよい連携が必要不可欠である。

このように指導者はピアノを通して生徒の人的成長に関わっていくことになる。それが情操教育を担っている私たち指導者の役目でもある。

②テクニックの修得

まず、指導者は生徒が取り組んでいる作品のテクニク面を解決しなければならない。課題は2つある。ピアノを弾くために必要な筋力を備えた手をつくることと自分の奏でた音に敏感に反応する耳をつくることである。ソルフェージュで耳を鍛え、正しい打鍵のための手づくりをしておかなければならない。このことは生徒にとっては実に困難な課題であり、その重要性を理解して真剣に取り組んでいる生徒は少ない。特に手づくりは一人で取り組まなくてはならない、時間のかかる作業となるために、自発的な強い意志が大きく影響する。

手づくりやテクニクの習得期間に、生徒は最も多くのことを学ぶ。リズムは崩れていないか、粒は揃っているかなどと判断しながら反復練習をし、自分の意のままに動く独立した指を作り上げていく。その間に何か問題があれば、その状況に応じて工夫し、解決策を自ら考え生み出していく過程で、反復力、判断力、思考力、応用力、集中力、そして忍耐を養うことができる。

さらにピアノ学習に際して、生徒は膨大な時間と労力をかけて音に対して真剣に向き合うことができるのか、親は子供が集中して取り組みやすい環境をどのように作り、くじけそうになる子供をどのように支えるのか、指導者は親子の努力を認めつつ最短コースでハードルが越えられるようにどのように導くのか、3者がそれぞれの立場で関わっていく。そこに3者の信頼関係が築かれ、生徒は目標に到達するための努力であることを意識し、保護者と指導者は情操教育の一環としてピアノ学習を通じた人づくりをしているという共通認識のもとに生徒を支援することを忘れてはならない。

③イメージづくりから表現へ

テクニクに取り組んでいる間に楽曲分析をする。まずカデンツを確認し、段落分けをして形式を把握する。旋律を図形的に捉える目を養い、どのような変化があるのかを見極める。また調性、拍子、速度などからその曲のおおよそのイメージをつくる。次はいよいよ表現方法を考える。そのためには時代的背景を理解することから始めたい。作曲家の生きた時代や宗教問題などを調べ、絵画や建築物から当時の様式を理解する。作曲家の伝記を読み、心情を想像する。さらに楽器の完成状況も把握するなどしてその作品に関わる情報を収集し、表現するための基盤をつくる。情報から描いた世界を念頭に、そのイメージに音を沿わせていくのである。

しかし、イメージづくりは知的情報だけでなく、自らの体験から描くことが大切である。リアルな体感によって表現力が瑞々しく生きてくるのである。その体験内容が表現に大きく影響するのである。体験といっても特別なことではなく、日常の生活すべてが体験にな

る。その生徒の年齢に応じた体験が大切なのである。子供の成長において10歳までの学習形態は体感が中心となる。そのため10歳までの子供にはできるだけ多様な実体験をさせたい。その役目はすべて家庭にあると考える。つまり子供たちの生活すべてがイメージを膨らませる源なのであり、両親が作る家庭環境そのものがイメージの湧き出る泉なのである。子供の成長には親の考えが大きく反映されるので、家庭の重要性が問われるところである。この段階で観察力、想像力、追求心、思考力、作曲家やその時代に生きた人々の心情を思う心などを養うことができる。

ピアノ学習は全ての教科に関わっている（図2）。各教科は独立することなく全てが絶妙なバランスで関わり合っているのである。それぞれの教科で学んだことを関連づけて上手に活かすことが子供の成長を促す秘訣であると考えられる。このような考え方で教育に向き合うと、各教科の必要性も再認識される。

時間芸術である音楽を表現するためには、知的に想像した世界を瞬時に音で表現することが必要となる。色彩豊かな美意識をもって、しなやかでなお且つ作品のもつパワーをも感じられるように仕上げていくことを目指す。そこでは美的感覚とセンス、バランス感覚、構築力、創造力、そして軽やかな運動能力と全てを見極める総合力で表現するのである。その総合力を身につけるために多方面からの学習と経験が必要であり、ピアノ学習と全教科が深く関わっていることを意識することが大切である。

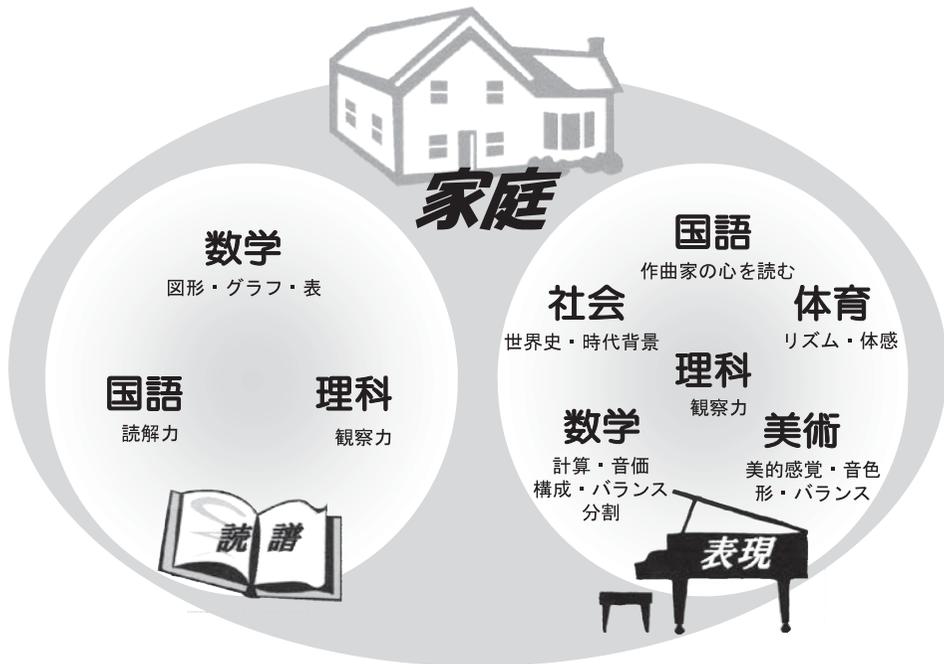


図2. ピアノ学習と教科の関わり

④演奏の披露

音楽にはステージで演奏するという宿命がある。そのために懸命に努力して当日を迎える。演奏者は、期待と不安が交錯する気持ちをコントロールして、自分の音楽を十分に表現することができるか、演奏中のハプニングに対して冷静に対処できるかなどと、いくつもの課題を抱えてステージに上がる。緊張と戦いながら自分の音楽を伝えようと奮闘するのである。このような経験は本番でしか経験できない。ステージでの演奏は、失敗を怖がらずにチャレンジしていく強さを学ぶのに最適である。そのために低年齢のうちからその経験を重ねることを勧めている。たとえ失敗したとしても、人として挫折を知ることとは大切なことであり、それをどのように乗り越えるかを学ぶ機会である。保護者との共同作業のもとに人づくりをしているのであるから、その行為に対して支援し、見守ることも指導者の役目である。子供の成長過程では、その子供をよく理解している両親以外の人が必要な場合が多々ある。そのようなときにピアノ指導者はその存在になり得る。もちろん生徒・保護者と深い信頼関係があることが絶対条件である。

このような経験のなかで子供たちは強い精神力と勇気と自信を身につけていくのである。音楽の演奏は再現芸術でありながら演奏者の自己表現の世界である。そこが実に魅力的なのである。時には他の人の演奏に触れてそのすばらしさを素直に認め、時には自らを反省し、また一步前に踏み出す目標を定めるのである。ここに豊かな人に育つ原点がある。私たち指導者は、ピアノを通して生徒たちが内に秘めた自己を表現できるように導いているのである。

5. まとめ

たった一回の演奏のために長時間をかけて親子で取り組んできた長期プロジェクト。その結果がいかなるものであろうとも、一つの目標に向かって親子で努力することの尊さは掛替えのないものであり、その親子には深い絆と信頼関係が約束される。この経験はピアノ学習だからこそできるのである。ピアノは必ず家で練習するという条件がある。親は子供が困難を乗り越えようとしている姿をつぶさに見られ、親として子供にどのように接すべきかを考える機会でもある。ピアノは親子で学び合えるものなのである。

現在世の中で必要とされている人材は社会に貢献できる人である。コミュニケーション能力があり、しっかりとした価値観をもち、精神的にも経済的にも自立している人である。そのような大人に成長するようにピアノを通して人づくりをすることを提案する。どのような分野でも一つのことを身につけるには反復が不可欠である。そしてそれを必ずやり遂

げようとする前向きな姿勢。そのような姿は、生きていく活力を周囲に発信して明るい環境を作り出す。ピアノで培った反復力が大いに役立つところである。さらに「今何をすべきか」を知るためには逆算能力を身に付けたい。まず到達点を定め、現在の状況を冷静に把握して到達するための学習方法を見出していく。そして軌道修正しながらも創意工夫をして着々と上へ昇り詰めていく人となることを目指すのである。

これまでに述べてきたこと全てをピアノ学習で養うことができる。そこでは常に曲全体を見つめて構成を立てつつ表現方法を決めていく作業をしている。総合的な観点で作品と向き合い、音楽を作っていく。どこをどのように改善すべきか自問自答しながら練習に励み、完成度の高い演奏を目指して磨きをかけていく。それまで試行錯誤をしながら反復し続けるのである。このような経験を重ねることで見通しよく物事を見極める眼を養うことができるのである。このように逆算して物を見る眼と考え方を身につけることで、常に現実と向き合いながらも自らの人生の方向を見つめることができ、精神的にも余裕のある人生が送れると思う。

昔から知育・徳育・体育と言われているが、この3つをバランスよく身につけるために情操教育が必要であり、その手段の一つとして音楽教育があることを認識して教育に携わりたい。私たち指導者に課せられた使命は「ピアノ教育＝情操教育＝人づくり」と考える。それを念頭において生徒を受け入れなければならない。30数年のピアノ指導とその間に子育てという経験をしたことで「ピアノ教育は人の総合教育であり、ピアノ教育は人づくりそのものである。」という境地に至った。そのような価値ある職にあることを常に意識しつつ、その経験を活かして社会に貢献したい。

参考文献

- 藤井伊都子・他. 1987. バイエルとソルフェージュ. ムジカノーヴァ18(11):35-49.
石丸由理 (訳). 1996. ダルクローズのリトミック. ドレミ楽譜出版社, 東京. 149pp.
岡 宏子・他. 1980. 親子とは何か. 立風書房, 東京. 260pp.